集合住宅における防災体験からみる住民交流の取り組み

サロン活動をきっかけに

○　日本福祉大学　茂　大祐　（６６９４）

キーワード：住民活動、サロン活動からのつながり、気づき

１，研究目的

A集合住宅は、住民に対するサロン活動を開催している。開催するきっかけとなったこととして、高齢化による閉じこもりの防止や高齢者同士の関係構築が基本にあった。しかし、現在では多世代交流も一つの目的となっている。現在、様々な活動が行われ、参加者からも充実した時間を過ごせたという回答をもらっている。また、保健所など外部の機関からの援助もいただきながら、活動を実施している。これらの活動が、地域に対しても参考事例としてよい影響を与えている。

昨年発生した東日本大震災を機に、いろいろな場所で緊急時の対応や意識について不安の声が出ている。サロン活動内でも、こわかった、どう逃げればいいのだろうという話題が出ている。しかし、普段コミュニケーションのない世帯（特に、ひとり暮らしの男性）や若い世代においては、呼びかけにも応じないことから、関わりに対する意識が低いものであると考えられる。

そこで本研究は、住民における安心の確保と災害に対する安全対策について、注意を喚起し、意識を向上させていく。

２，研究の視点および方法

これまで、高齢者や子ども対象となるサロン活動が行われてきた。そこで、かかわりを充実させていくためには、多くの世代との交流が必要である。また、様々な人たちとの交流による刺激も重要なものとなってくる。そこで、本研究では、住民の安全意識と防災対策に焦点を当て、「体験」をすることで意識が高まるかという点について調査し、検証を行っていく。

本研究は、3 ヶ月に 1 回、日曜日の朝に行われている大掃除と合わせた企画で進める。対象者は、全住民対象である。強制参加ではなく、任意参加である。大掃除では、棟ごとに草むしりやゴミ拾い、備品の破損確認などを中心に行っている。また、その時に挨拶や話をしたりすることで、コミュニケーションの充実の一端も担っている。その後、集合住宅内にある広場において、災害に関する体験学習を行うものである。

そこで、ここでは次の 2 点について明らかにしていく。①体験講座に参加をすることによって、災害に対する意識は変化したか。②体験講座をきっかけに、自宅で生かしていきたい事は何か。以上の点について、進めていく。

調査方法としては、自治体の中心に動いている方や参加者に対して、インタビューを中心に行う。内容としては、意識や率直に感じた感想などについて行う。また、運営上における効果や課題についても聞き取りを行う。

３，倫理的配慮

本研究について、調査対象となる集合住宅の自治会に承諾、許可を得ている。また、個人情報等に関しては、十分に配慮を行っている。

４．研究結果

本活動は、現在複数回活動を行っている。場所は、集合住宅内における広場を利用し行っている。主な活動としては、次の様なものがある。①火災時を想定したバケツリレー、②消火器の使い方、③非常食の試食会などを行っている。ここでは、災害対策ということで、消防署の方が来て、講話をするだけではなく、実際にいろいろなものに触れて、体験する事を重要な目的として位置付けている。

1 回の活動の参加人数は、100 人程度であり、大半は高齢者の方が中心でとなっている。一部ではあるが、親子連れも参加している。できる限りいろいろな体験をして、感じてもらうためにも、消火器や非常食なども、できるかぎり多く確保して行った。

インタビュー結果

・サロン活動で友達ができて、それをきっかけに参加するようになった。
・通常のサロン活動にはない活動ができて良かった。
・バケツリレーの声かけが話しをするきっかけとなった。
・バケツが重く感じる。筋力が弱くなってきているかもしれない。
・消火器が思っていたよりも堅い。高齢の私にとっては難しい。
・レトルトの非常食が思ったよりもおいしかった。
・レトルトの非常食であったが、時間がたつと硬いなって食べることができない。
・子どもは消火器に触っていけないものと思っていた。　等

結果として、参加者において様々な「気づき」のきっかけになったのではないかといえる。通常、サロン活動でしか知り合わない方以外のつながりなど、刺激のある場であったといえる。災害に対する意識の変化については、体験講座によって、日常では経験のないことをすることにより、できると思っていたことが難しい、消火器が堅い等、分かったことが大きな進歩ではないかといえる。自宅で生かしていきたい点については、非常食を食べる事が難しい高齢者においては、緊急時にはどうするべきか考えるきっかけとなり、良かったのではないかとえる。

５．考察

本研究を実施したことにより、様々な意味で「きっかけ」と「気づき」ができたことが非常に良かったと考えている。日常生活では全く見えてこなかったことが、実際に体験をすることで、具体的に意識する事ができ、考えるきっかけができたのではないかと考えている。また、サロン活動がきっかけで参加をしてくれるということを聞いた時には、継続的に行われていることで効果が出てきていると感じた。そのつながりもあり、子どもたちの参加も促進したのではないかと考えている。

その一方、課題も明らかとなったと考えている。１.「教育の課題」である。消火器など触れてはいけないという教育がされている様である。そのため、触れないというのではなく、使用する方法と状況をしっかり伝える教育をする必要がある。2.「参加者の少なさ」である。100 人程度の参加はあったものの、まだまだ少ない状況である。コミュニケーションの充実を図ることにより、何かの時に、気づきにつながり援助につながることから、今後も周知を進めて参加してもらうようにつなげていく必要がある。

今後、様々な世代の交流を深め、災害に強い集合住宅を目指したいと考えている。